

創立120周年記念式典 式辞

今から120年前の明治32年に、本校は群馬県高等女学校として開校されました。西暦では1899年、時はまだ19世紀でした。そこから20世紀の100年を経て21世紀となり、元号は、明治・大正・昭和・平成と移り変わって、今年、本校の開校記念日でもある5月1日に改元が行われ、令和の時代となりました。新たな時代の始まりが街中のいたるところに感じられる今日、群馬音楽センターにおいて、このように盛大に創立120周年の記念式典を挙行できますことは、大きな喜びであります。ご臨席を賜りました群馬県議会議員様、高崎市長様をはじめとするたくさんのご来賓の皆様、心より感謝申し上げます。

また、本日は同窓の皆様にも大勢お集まりいただきました。同窓の皆様の中には末広町の校舎で学んだ方も、稲荷町の校舎で学んだ方も、いらっしやと思います。学んだ場所は異なりますが、いずれの方も十代後半の女性として最も多感な時期を本校で過ごされました。楽しかった思い出、つらかった思い出、そのたくさんの思い出のすべてが蓄積されて、今の本校があります。そしてそれを受け継ぐ学生が、この会場に集っております。彼女たちが心の珠を磨かんとする姿勢は、今も昔と変わることはありません。学び舎は変わりました。学ぶ人は年ごとに変わります。しかし、利根の流れが絶えぬように、榛名の山の高きにならわんとする精神は、絶えることなく、美しく、その尊き力を失うことなく受け継がれています。そして、この流れはついには海と成り行き、万物を生み出す存在となります。

しかるに、伝統を継承するという行為は、過去を懐古しそこに固執するというものではありません。むしろ伝統を継承しようとする行為が向かう方向は、全く逆であり、未来を創造するエネルギーの根源を、生み出すそうとする行為でもあります。なぜなら、既にある知識・技術を、しっかりと継承したところに生まれる問いこそが、新たな発見の源であるからです。つまり、新しい時代に対応することのできる知恵を手に入れるには、過去にあることを正しく学び、そこから生まれる問いに誠実に答える必要があるということです。そしてこの答えが導くところに我々の未来が創造されるということです。故人は遙か昔、この創造の仕組みを簡潔に、「温故知新」と言い切りました。故きを温ねて新しきを知れば、もって師となるべし。

令和の時代は、人工知能や情報処理技術の進化により、社会や経済の構造が大きく変化する時代と言われています。また活発なイノベーションにより、一つの技術が開発されても、それが定着するよりも先に次の技術が生まれてしまいます。従来の社会制度や規範意識、価値観といったものが、うまく機能しなくなっているのが現状であり、まさに未知の時代が到来しつつあります。しかし、恐れることはありません。

先人が切り開いた道をたどることはできます。そしてそこに安住することもできます。ただ、そのたどり着いたところから次の一步を踏み出すことは、難しい。けれどその一步を踏み出さなくてはならない時は来ます。その時に、その一步を踏み出すその勇気を与えてくれるのが、先人の切り開いた道が既にそこにあるという事実です。そしてその道が証明する「学ぶ」という行為の可能性です。我々の目の前には、毛野の広野が遙かに広がっています。そしてそこには果てなく学びの道が続いています。我々はこの道をたゆまず倦まず進まなければなりません。その学びの道を勇みゆく決意を、創立120周年記念式典の今日、改めて胸に刻んでください。

令和元年6月28日

校長 高橋 康幸